

文部科学省
平成28年度音声教材普及推進会議
(関東地区)

国立特別支援教育総合研究所
情報・支援部 笹森 洋樹

3つの研究発表から

- 教科書が読めない
 - スタートラインにつけない
- 個々の困難さには個人差がある
 - 利用者には教育的効果が出ている
 - どのような子どもにどう活用するか
- 開発者のデザインだけでなく、
使い勝手は利用者がきめる

3つの事例発表から

- 教科書を読めないことはスタートラインにつけないこと。
- 読み書きの困難さは子ども一人一人その背景や要因が異なる。
- 多様なアセスメントツール、支援ツールを情報収集する。
- 効果は子どもが判断、子どもに効果を確認する。
- 「自分だけ特別」への抵抗感の視点も大切。
- 個別指導の場から通常の学級へ、小から中学校へ。
- 普及のためには教職員、保護者への研修も重要。

音声教材の普及させるために

- ・ 通級のような個別指導の場の活用
- ・ 家庭学習における活用
- ・ 通常の学級における活用

→ 場面による使い方の違い、オプション、カスタマイズ

- ・ 通常の学級で誰でも使える授業づくり
- ・ 異なる学び方を認め合える学級づくり

→ 校内における共通理解

→ 教育委員会を主体とした研修機会

→ 関係機関、保護者との連携

音声教材を普及させるために

- 学習支援のためのアセスメント
 - ・つまずきの把握と支援の必要性
- 特性理解から主体的な学びへ
 - ・本人の教育的ニーズの把握
- 「わかる」「できる」が肯定感・効力感に
 - ・学習評価のフィードバック

活用による子どもと教師の成功体験

学習支援のためのアセスメント

- A 認知特性のアセスメント
- B 行動特性のアセスメント
- C 教科学習のアセスメント

- ①個別の様子と集団での様子
- ②推測できるつまずきの要因
- ③指導の方針（個別で、集団で）

「わかる」「できる」に向けて

メソッド

(何を使い、どう教えるか)



グラウンドデザイン

(どのような授業をつくるか)



アセスメント

(子どもを知る・クラスを知る)

授業のユニバーサルデザイン化

全員が楽しく「わかる・できる」授業が、誰でも、繰り返し何度でもできるように（再現性の確保） 授業づくりの工夫 ①「焦点化」②「視覚化」③「共有化」

学びのユニバーサルデザイン

誰にでも使える（一人のためでなく、一つの方法を全てに当てはめるのでもない） 個々のニーズに応じて調整ができる、より多様でより柔軟な目標、方法の提供
①情報提示 ②行動と表出 ③取り組み方

「わかる」「できる」が肯定感・効力感

学習能力（知識・理解）

（子ども・保護者・教師のニーズを考慮して）

ソーシャル・スキル（技能）

（対人関係、コミュニケーション・スキルを含め）



自己肯定感・自己効力感

（自己理解、自己認識、情緒的安定を基盤に）

合理的配慮により学び方が変わる

「意思の表明」

- 自分に必要な合理的配慮について表明できること
- 自分が力を発揮できる環境と方法がわかること

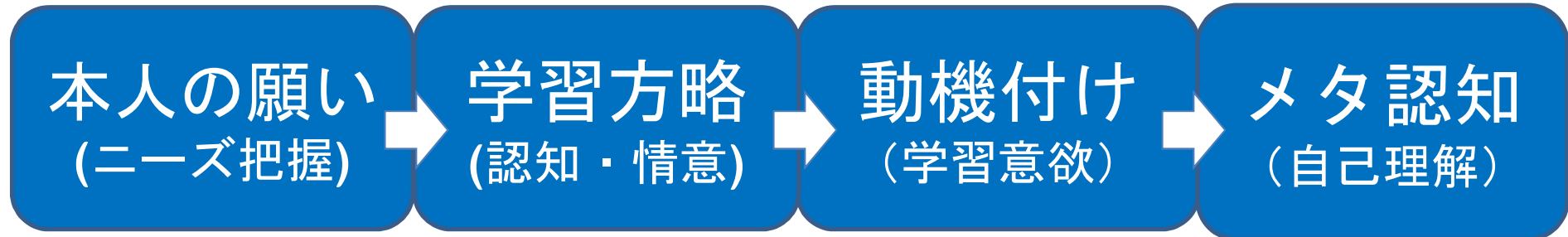
「実態把握と基礎的環境整備に基づく判断・決定」

- 十分な教育が受けられるための合理的配慮かを判断

「定期的な評価と見直し」

- 必要な合理的配慮により適応状況が改善していく
- 教育的ニーズが変われば合理的配慮も変わっていく
- 自分の特性に関する自己理解が促されていく

特性理解から主体的な学びへ



自分の特性がわかり、
自分なりの対処の仕方を身に付けることが
できるように主体的な学びを支援する。
自分に合った方略がわかるように。
合理的配慮のための意思表示へ。

